

アン・セクストンの詩

— 解説と訳詩五篇 —

木村 淳子

アン・セクストン (Anne Sexton, 1928—1974) は、1960年代が始まると同時に詩人としての活動をはじめた、アメリカの女流詩人である。1974年10月に、みづから生命を絶ったこの詩人は、生前に八冊の詩集を書き残した。それらは次の通りである。

- | | |
|---------------------------------------|------|
| 1. <i>To Bedlam and Part Way Back</i> | 1960 |
| 2. <i>All My Pretty Ones</i> | 1962 |
| 3. <i>Live or Die</i> | 1966 |
| 4. <i>Love Poems</i> | 1969 |
| 5. <i>Transformations</i> | 1971 |
| 6. <i>The Book of Folly</i> | 1972 |
| 7. <i>The Death Notebooks</i> | 1974 |
| 8. <i>The Awful Rowing Toward God</i> | 1975 |

これらの詩集は、一人の人間の生の軌跡を語るものとして興味深い。「生」と「死」の両極の間を絶えず揺れ動く魂の振動は、両極の間を振動する磁針の動きにも例えることができよう。セクストンの詩は、このような、アンビヴァレントな魂の状況の克明な記録であるところに第一の意義がある。だから、セクストンの詩にうたわれる世界の狭さ、思想の貧困さを云々することは、必ずしも的を得ているとは言い難いのではなかろうか。

生涯

アン・セクストンは、1928年9月9日に、マサチューセッツ州ニュートンに於いて、ラルフ・チャーチル・ハーヴェイと、メアリ・グレイ・スティプルス・ハーヴェイの第三子として生れた。ハーヴェイ家は、1600年代にイギリスからこの地に渡来し、1800年代はじめには、すでにその富によってこの地方の名家となっていた旧い家柄であった。ニュー・イングランド地方の旧家の末娘として、アンは幸福な少女時代を送ったはずである。彼女の幼年期の幸福な思い出は、メイン州に祖父が持っていた宏壮な別荘にまつわるものである。あるいは、クリスマスのサンタクロースの到来である。父はサンタクロースの衣裳に身をつつみ、階上の小部屋で大祖母ナナの振る鈴の音と共に家にとびこんでくる⁽¹⁾。後年我が子のために同じようなクリスマスを演出したアンの心の中には、この幼い時のクリスマスの思い出が焼きつけられていたのである。しかし、この幸せな幼年時代は、彼女の詩の中では、むしろ不幸でみじめなものとして回想されている。

I will speak of the little childhood cruelties,
 being a third child,
 the last given
 and the last taken —
 of the nightly humiliations when Mother undressed me,
 of the life of the daytime, locked in my room —
 being the unwanted, the mistake
 that Mother used to keep Father
 from his divorce.
 Divorce ! (From "Those Times..." in *Live or Die*)

私は幼い頃の残酷な思い出を語ろう
 三番目の子供だったから、
 末の子で
 望まれない子だったから、
 母が衣服を脱がせてくれた夜毎の屈辱を、
 私の部屋の中に閉じこめられていた日中の生活を、
 欲しがられない子だったから、
 まちがって産まれた子だったから
 母が父から離婚を言い渡されないようにと、
 離婚を！

あるいは、同じ詩の中の別の一節は次のようである。

At six

I lived in a graveyard full of dolls,
 avoiding myself,
 my body, the suspect
 in its grotesque house.
 I was locked in my room all day behind a gate,
 a prison cell.
 I was the exile
 who sat all day in a knot.

六才のとき

私は人形でいっぱいの墓場に住んでいた、
 自分自身を、
 自分の身体を、そのグロテスクな家の

うたがわしい人物を、
 避けて。
 私は門のうしろの私の部屋、
 監獄の独房、
 に一日中閉じこめられていた。
 私は終日身を固くしてうづくまる
 追放者だった。

これらの詩行では、己れの存在は余り者、何らかの便宜のため（つまり、母が父から離婚を言いわたされなかったための）に、この世にもたらされたものとして認識されている。このような存在の認識は、この他の多くの詩の中に見出されるものである。姉の一人は幼年時代をふり返って、アンと友だちになるのはむづかしかった、⁽²⁾と言う。

幼年時代の気むづかしさは、長ずるに従って、周囲に対する反抗、特に学校ぎらい、勉強ぎらい、という形であらわれてくる。両親は、1945年秋に、アンを私立の寄宿学校に転校させたが、この頃、アンは詩を書いている。恋愛、孤独などをテーマにしたものであるが、後年の詩人アン・セクストンには結びつくところは少ないようである。

さて、アンの周囲に対する反抗は、1948年8月のアルフレッド・セクストンとの駆け落ち結婚によって最高潮に達した。二人はノース・カロライナに行って、メソジスト教会で、二人だけの結婚式を挙げたのであった。その後の二人は生活上での様々の困難を乗り越えねばならなかった。やがて夫のカヨは、アンの父の助けで羊毛会社に職を得、生活は一応安定するが、この頃朝鮮動乱が勃発し、カヨも海軍に入隊する。1953年7月長女リンダ・グレイ誕生。1955年8月次女ジョイス誕生。セクストン一家は傍目には幸せな状態にあるように見えた。しかしアンの精神状態は、この頃から不安定となって行き、ついに家族は彼女を精神病院

に入院させねばならなかった。これ以来、アン・セクストンは亡くなるまで入院，退院をくり返し己れの精神と向い合い，不安定な精神に対して執拗な戦いをいどまなければならなくなったのである。彼女の詩は，己れの精神を凝視し，揺れ動く精神をしっかりとつなぎとめておくための手段として書きはじめられた。はじめはおぼつかなく，やがてW・D・スノッドグラス⁽³⁾を直接の師とし，シルヴィア・プラーズ⁽⁴⁾やマクシーン・クーミン⁽⁵⁾らを友としながら，彼女はひたすらに詩作をつづけた。1960年に処女詩集である，*To Bedlam and Part Way Back* が出されて注目を惹き，第三詩集 *Live or Die* によって，1967年のピュリッツァ賞を与えられた。この後五冊の詩集を出したのであるが，この間，1963年には The American Academy of Arts and Letters によって一年間の海外研修の機会⁽⁶⁾を与えられた。セクストンは，フランス，ベルギー，イタリー，スペインの旅に赴くが，この旅行は，彼女の健康状態の悪化によって，途中で挫折してしまう。また彼女は，この頃から各地の大学その他で poetry reading の会に招かれて，自作の詩の朗読をする。またボストン大学で詩の講義を始めるようにもなり，いくつかの名誉学位も受けている。詩人としての盛名も上り，活動も多忙を極めるようになり，一応精神的にも安定して来たかに見えるのであるが，しかし，恐らく，セクストンは，絶え間ない精神の不安と戦っていたのであろう。最後の詩集 *The Awful Rowing Toward God* は，不安な精神がようやく見出した安息の場を見せてくれはいるのであるが。

Snow,
 blessed snow,
 comes out of the sky
 like bleached flies.
 The ground is no longer naked.

The ground has on its clothes.
The trees poke out of sheets
and each branch wears the sock of God

There is hope.
There is hope everywhere.
I bite it.

Someone once said:
Don't bite till you know
if it's bread or stone.
What I bite is all bread,
rising, yeasty as a cloud.

There is hope.
There is hope everywhere.
Today God gives milk
and I have the pail. (From: "Snow" in *The Awful Rowing
Toward God* 以下 A. R. T. G. と略)

雪,
祝福された雪
が、空から漂白されたはえのようにやってくる。
地面はもはやむき出しではない。
地面は衣服をつけている。
木々はシーツの下からつき出ている
枝は神の靴下をはいている。

希望がある。

いたるところに希望がある。

私はそれを喰べる。

ある人がこう言った！

パンか石ころか見分けがつくまで

喰べてはいけないよ、と。

私の喰べるものはみなパンだ。

雲のようにふくらみ、発酵する。

希望がある。

いたるところに希望がある。

今日 神はミルクをくれる

私は手おけを持っている。

神に対する信頼と希望で充たされるとき、不可知と見えた死でさえ、
もはや恐ろしいものではなくなってしまう。

Nature is full of teeth

that come in one by one, then

decay,

fall out.

In nature nothing is stable,

all is change, bears, dogs, peas, the willow,

all disappear. Only to reborn.

(From "The Wall" in A. R. T. G.)

自然界は歯でいっぱいだ

一本一本生えてきて、やがて

朽ちて、
抜けてしまう。
自然界には変らぬものはない、
すべては変化だ、熊も、犬も、豆も、
あの柳も、
すべて姿を消す、再生するために。

そして、アン・セクストンは、さらに、己れを外界に向って開き、外界と“touch”しようとする。

This is my tale which I have told,
if it be sweet, if it be not sweet,
take somewhere else and let some return to me.

(From: “Rowing” in *A. R. T. G.*)

これが私の話しです。
よい話しであろうと、なかろうと、
どこかに伝え、幾分かを私に返して下さい。

The Joy that isn't shared, I've heard
dies young. (From: “Welcome Morning” in *A. R. T. G.*)

分ち合われぬ喜びは、
若くして死ぬ、と聞いたことがあるのです。

1974年10月4日、アン・セクストンは、誰にも知られずに、みずからの手で生命を絶ったのであった。楽しみにしていた大学の秋学期が始ま

るところであった。*The Awful Rowing Toward God* の出版が間近かであった。彼女に身近かな人々は、それを予期しなかったわけではない。しかし、それにしても、彼女の死は、唐突であった。最後の詩集の喜びと、希望と、満足と、どのように見なすべきであろうか。

詩について

アン・セクストンが詩を書きはじめた動機については、すでに述べたとおりである。精神分析医に治療の手段として、書くことをすすめられ、書きはじめられた詩は、まず第一に自己の内面と過去を凝視し、ほの暗い精神の内奥の探索から始まった。それ故に、その題材の多くは全く個人的なものである。己れの過去の体験、肉親、特に両親にまつわる様々なことから、己れの狂気、日常生活などを、セクストンはくり返し、くり返し詩の中にうたいこむ。読者はそれらの詩を読んで、絶えず「生」と「死」の両極の間を振れてやまない、不安定な精神を感じとる。アン・セクストンにとって、この世における己れの存在ほど不可解で不条理なものはない。この世は悪意に満ちた、恐ろしい場所で、自分自身は、求めてこの世に生れ出て来たのではなく、まるで自動車の部品のように押し出されて来たのである。

I was stamped out like a Plymouth fender
into this world.

(From "Rowing" in *A. R. T. G.*)

私はプリマス自動車の泥除けのように
この世に押し出された。

あるいは、次のような詩句もある。

Eve came out of that rib like an angry bird.
She came forth like a bird that got loose
suddenly from its cage.

(From: "Rats Live On No Evil Star" in *The Death Notebooks*)

イヴは怒った鳥のようにあばら骨から出て来た。

彼女は、突然かごから放された鳥のように出て来た。

こうした存在の認識の上に立って彼女は、まさに、怒りをこめて己れの生に立ち向かい、「真実の生」を探ろうとする。それは、現実には彼女が直面している不条理な生を生き抜いたときに発見できるのかも知れないし、それとも、この不条理な生に終止符を打って、この世から飛び出した次元にあるのかも知れない。「生」と「死」の両極を志向する精神は、つまり、「真実の生」を求める努力のあらわれではなからうか。絶え間なく「生」を希求しながら、反面「死」を求め、憧れるアンビヴァレントな精神は、必死にあがいて、「死」を先取りしようとさえする。だが、やはり「死」は恐怖である。「死」は、抽象的な概念ではなくて、一つの実在として、彼女にせまって来る。

Death,
you lie in my arms like a cherub,
as heavy as bread dough.

(From: "Baby" in *The Death Notebooks*)

死よ、
おまえは天使のように、
パンのこね粉のように重たく

私の腕にある。

あるいは「死」は、また別の姿で現われる。

Mr. Death, you actor, you have many masks.

Once you were sleek, a kind of Valentino

with my father's bathtub gin in your flask.

(From "For Mr. Death Who Stands With
His Door Open" in *The Death Notebooks*)

ミスター「死」、役者のあなた、

あなたは多くの仮面を持っている。

いつか父の密造酒をフラスコに入れて、

あなたはヴァレンチノのようにかっこ良かった。

己れの実存に対する怒り、「生」への希求、「死」に対する憧れ、また、突如として襲ってくる不可解な「死」に対する恐怖が、アン・セクストンの詩の主題となっている。彼女は、外界には目もくれない、彼女は常に、まっすぐに己れの実存の深部へと下降しようとする。題材とするものはすべて、この下降への足場となっている。この点において、アン・セクストンは、求心的な詩人であると言える。

さて、1960年代は、アメリカの詩の歴史の中で一時期を劃す時代であった。今世紀に入ってなされた革新的試みの数々は、二次大戦後に至って、古典的様相を帯びはじめていた。60年代に現われた新しい詩人たちは、一つの時代をのり越え、新しい時代を劃す試みをはじめた。例えばいわゆる「開かれた詩」の運動であるし、他には「ビートニックの詩人達」の出現であった。その他、アメリカの各地、ニューヨークや、特に

サン・フランシスコを中心とする西海岸地方で多くの詩人たちが、新しい詩の運動を起していった時代であった。女流の詩人たちは、新しい時代に向って、女性の権利を主張し、その性を解放しようとする努力の中で詩を書いて行った。しかし、アン・セクストンは、こうした新しい時代の中では、かなり伝統的なスタイルを守っている詩人である。彼女の詩の多くは、定型詩と言えるものである。セクストン自身が、例えば己れの狂気についての詩を書くときには、自由詩形よりは、定形を守ったほうが書きやすい⁽⁷⁾、と述べている。おそらく、彼女の用いる詩型は、彼女の存在そのものと深くかかわり合っている。一つには、絶えず揺れてやまない精神をつなぎとめておこうとする無意識の努力のあらわれと見ることができるし、他には、彼女の精神世界の広がり⁽⁸⁾の範囲を劃するものと見ることもできるのである。詩の仲間であったシルヴィア・プラーズを評して、セクストンは、“She had very open speech rhythms, something that I didn't always have.”⁽⁸⁾（彼女には非常にオープンな口語のリズムがあったが、それは私の持たないものだった）と言っているが、そのシルヴィア・プラーズの詩が、言葉の柔軟な使用法、大胆なイメージの組合せによって、思いもかけぬような世界を現出させて行くのに比べて、（シルヴィア・プラーズの詩には、開花してゆく花にも似た趣きがあるのであるが）セクストンの詩は、常に狭い枠組の中で、狭い、パーソナルな世界を現出させるだけである。しかし、この狭い世界の中でセクストンのおこなう自己凝視には驚くべきもの⁽⁹⁾があって、非常にパーソナルな体験が、日常的な言葉を素材にして、一つの型にはめられるとき、そこに普遍的な、しかも感傷を排除した別の世界があらわれてくる。その良い例が *Live or Die* に収められている “Flee On Your Donkey”⁽⁹⁾ であろうが、彼女の良く作り上げられた詩は、どれも、アメリカ口語を用いて、個人的体験がゆるやかな詩型の枠組の中にはめこまれると、奇妙に乾いた普遍性を持った世界があらわれてくるのである。同じく *Live*

or Die の冒頭に掲げられている “One For my Dame”⁽¹⁰⁾ では、童謡風なリズムの中にうたいこまれた、死の恐怖にみちた一つの世界、なぞにみちた人生を現出している。この詩も彼女の佳作の一つであろう。

Be careful of words,

.....

Words and eggs must be handled with care.

Once broken they are impossible

things to repair.

(From: “Words” in *A. R. T. G.*)

言葉に気をつけなさい。

.....

言葉と卵は注意して扱わなければ

なりません。

ひとつたび壊れたら、取り返しのつかぬ

もの達だから。

アン・セクストンは、アメリカの詩の伝統に新しさをつけ加えた詩人ではない。むしろ、伝統に従って、注意深く詩型をえらび、言葉をえらんで詩を書いた詩人である。大胆な詩法は彼女のものではなかった。きびしい自己凝視そのものが、即ちセクストンの詩なのであった。この点において、彼女は、彼女の生れ育ち、生活したニューイングランドの、詩の伝統を、そのまま受け継いでいる。「アメリカ詩の母」と呼ばれる、アン・ブラッドストリートが、植民地の生活の中で、己れを見つめたように、もう一人のアンもまた、己れを見つめながら詩を書いて行ったのだった。

アンセクストンの詩五篇

The Starry Night

That does not keep me from having a terrible need
of — shall I say the word — religion. Then I go
out at night to paint the stars.

Vincent Van Gogh in a letter to his brother

The town does not exist
except where one black-haired tree slips
up like a drowned woman into the hot sky.
The town is silent. The night boils with eleven stars.
Oh starry starry night! This is how
I want to die.

It moves. They are all alive.
Even the moon bulges in its orange irons
to push children, like a god, from its eye.
The old unseen serpent swallows up the stars.
Oh starry starry night! This is how
I want to die:

into that rushing beast of the night,
sucked up by that great dragon, to split
from my life with no flag,
no belly,
no cry.

(From: *All My Pretty Ones*)

星 ⁽¹¹⁾ 夜

それは私に、あるとほうもない必要性を——思い切って言おうか——
宗教だ、宗教の必要性を感じることを妨げない。そんな時、私は、夜
戸外に出て、星を描くのだ。

ヴィンセント・ヴァン・ゴッホ

弟への手紙より

町は存在しない。

溺れた女のように 一本の黒髪の木が

熱い空に すべりこむところ以外には。

町は沈黙している。夜は十一の星で沸騰する。

ああ、星夜よ！私は

こうして死にたい。

動く。すべてが生きている。

月でさえ、神のようにその目から子供達を押し出そうとして

オレンジ色の枷の中でふくらむ。

年老いた目に見えぬ大蛇が星を飲みこむ。

ああ、星夜よ！私は

こうして死にたい。

襲いかかるあの夜の獣

巨大なあの龍に飲みこまれて、

旗も

腹わたも

叫びもなく

私の生から引き裂かれて。

Said The Poet To The Analyst⁽¹²⁾

My business is words. Words are like labels,
or coins, or better, like swarming bees.

I confess I am only broken by the sources of things;⁽¹³⁾
as if words were counted like dead bees in the attic,
unbuckled from their yellow eyes and their dry wings.
I must always forget how one word is able to pick
out another, to manner another, until I have got
something I might have said ...
but did not.

Your business is watching my words. But I
admit nothing. I work with my best, for instance,
when I can write my praise for a nickel machine,
that one night in Nevada: telling how the magic jackpot
come clacking three bells out, over the lucky screen.
But if you should say this is something it is not,
then I grow weak, remembering how my hands felt funny
and ridiculous and crowded with all
the believing money.

(From: *To Bedlam and Part Way Back*)

詩人は分析医に言った

私の仕事は言葉。言葉はレットルのようなもの、
あるいは貨幣、あるいはせいぜい、群がる蜂のようなもの。
告白するが、私はただ、物事の本源によってのみ壊される。
言葉は、あたかも屋根裏部屋の死んだ蜂のように見なされて、
黄色い目をはずされる、乾いた翅をむしられる。

私はいつも忘れねばならない
いかに一つの言葉が別の言葉を拾い出し、
別の意味を与えることができるかを、
私が言うはずであった、だが、
言わなかったことを手に入れるまでは。

あなたの仕事は私の言葉を見張ること。
だが、私は何も容認しない。私は最善をつくす。例えば、
自動とばく機を賞めたたえて書くとき、
あのネヴァダでの一夜、幸運のスクリーンの上で、三度鐘が響くと、
魔法の賞金が私のものとなったことを書くとき。
だが、もしあなたが、これはちがう、と言うなら、
そのとき、私は挫けてしまう、
私の手が奇妙におろかしく感じられて、
私のものだと思える金でいっぱいになったことを思い出して。

Walking In Paris

I come back to your youth, my Nana,⁽¹⁴⁾
 as if I might clean off
 the mad woman you became,
 withered and constipated,
 howling into your own earphone.
 I come, in middle age,
 to find you at twenty in high hair and long Victorian skirts
 trudging shanks' mare fifteen miles a day in Paris
 because you could not afford a carriage.
 I have walked sixteen miles today.
 I have kept up.

I read your Paris letters of 1890.
 Each night I take them to my thin bed
 and learn them as an actress learns her lines.
 "Dear homefolks" you wrote,
 not knowing I would be your last home,
 not knowing that I'd peel your life back to its start.
 What is so real as walking your streets!
 I too have the sore toe you tend with cotton.
 In Paris 1890 was yesterday
 and 1940 never happened —
 the soiled uniform of the Nazi
 has been unravelled and reknit and resold.
 To be occupied or conquered is nothing —
 to remain is all!

パリをさすらう

おば様、私はあなたの青春にもどってきました。

老いぼれて、かたくなになって、

自分の補聴器にわめき散らしていた

狂女のあなたを振り払うことができるかと。

私は中年になってやってきました。

髪を高く結び上げて、ヴィクトリア風のスカートをはき、

馬車に乗るお金もなくて

パリの街中を一日15マイルも膝栗毛したという

はたちのおば様を見つけるために。

私は今日16マイル歩きました。

私はあなたに負けません。

私は1890年のあなたのパリの手紙を読みます。

毎晩私はセリフを暗記する女優のように、

あなたの手紙を貧相なベッドで読むのです。

「故郷の皆さんへ」とあなたは書きました、

私があなただの最後の故郷となることも知らずに、

私があなただの生涯を引きむいて、その最初に

までさかのぼろうとするのも知らずに。

あなたの街路を歩むことほど生々しいことがあるでしょうか。

あなたと同様私のつま先も痛んでいます。

パリでは1890年は昨日のことです。

1940年は決してありませんでした——

汚れたナチの軍服は、解きほぐされ、編みなおされて、売られました。

占領されること、征服されることなど何事でもありません。

大切なのは生き残ることです！

Having come this far
I will go farther.
You are my history (that stealer of children)
and I have entered you.
I have deserted my husband and my children,
the Negro issue, the late news and the hot baths.
My room in Paris, no more than a cell,
is crammed with 58 lbs. of books.
They are all that is American and forgotten.
I read your letters instead,
putting your words into my life.

Come, old woman,
we will be sisters!
We will price the menus in the small cafés, count francs,
observe the tower where Marie Antoinette awaited her beheading,
kneel by the rose window of Notre Dame,
and let cloudy weather bear us home early
to huddle by the weak stove in Madame's kitchen.
We will set out tomorrow in stout shoes
to buy a fur muff for our blue fingers.
I take your arms boldly,
each day a new excursion.
Come, my sister,
we are two virgins,
our lives once more perfected
and unused.

(From: *Live or Die*)

こんなに遥かにやって来て、
私はもっと先へと進みます。
あなたは私の歴史（子供盗人）です。
私はあなたの中に入りこんでしまいました。
私は夫や子供をおき去りにして、
黒人問題も、最新のニュースも、熱いお風呂も捨てて来ました。
せいぜい小部屋ほどの、パリの私の部屋には
58ポンドの本がつめこまれています。
それだけがアメリカのもの、しかも忘れられています。
代りに私はあなたの手紙を読みます。
あなたの言葉を私の生命の中にとりこみながら。

老いたひとよ、おいでなさい。
姉妹になりましょう！
小さなカフェで品定めし、フランを勘定しましょう。
マリ・アントワネットが絞首台を待っていた塔を見物し、
ノートル・ダムの薔薇窓の傍に膝まづき、
曇り日なので早めに帰りましょう。
そしてマダムの台所の、とろ火のストーブの
そばで身を寄せ合いましょう。
明日は頑丈な靴をはいて、冷たくなった指を
あたためる毛皮のマフを買いに出かけましょう。
私は思い切って、あなたの腕をとります、
毎日が新しい旅です。
さあ、姉妹よ、私たちは二人の処女、
私たちの生命は、もう一度完全なものとなり、
新しくなるのです。

(15)
Rowing

A story, a story !

(Let it go. Let it come.)

I was stamped out like a Plymouth fender
into this world.

First came the crib
with its glacial bars.

Then dolls
and the devotion to their plastic mouths.

Then there was school,
The little straight rows of chairs,
blotting my name over and over,
but undersea all the time,
a stranger whose elbows wouldn't work.

Then there was life
with its cruel houses
and people who seldom touched —
though touch is all —
but I grew,

like a pig in a trench coat I grew,
and then there were many strange apparitions,
the nagging rain, the sun turning into poison
and all of that, saws working through my heart,
but I grew, I grew,

and God was there like an island I had not rowed to,
still ignorant of Him, my arms and my legs worked,

漕 ぐ

ある話！ 話！

(伝えなさい、もどらせなさい)

私はプリマス車の泥除けのように
この世に押し出された。

はじめに、氷の横木のついた
揺りかごがあった。

それから人形

プラスチックの口唇に愛を捧げた。

それから学校

小さな椅子の列、

何度も名前を書き散らした、

だがいつも水底に潜む

ごこちない腕は動かぬ異邦人。

それから残酷な家での生活があった、

人々はめったに触れ合わなかった、

触れ合うことがすべてというのに——

私は、

トレンチコートを着た豚のように成長した。

そしてそれから幾多の奇妙な出現があった。

小うるさい雨、毒に変る太陽など、など、

のこぎりかが私の心臓を引き切る、

だが私は成長した。

すると神は、まだ行ったことのない小島のように、

そこに在った。

神を知らずに、手足を動かして、

and I grew, I grew,
I wore rubies and bought tomatoes
and now, in my middle age,
about nineteen in the head I'd say,
I am rowing, I am rowing
though the oarlocks stick and are rusty
and the sea blinks and rolls
like a worried eyeball,
but I am rowing, I am rowing,
though the wind pushes me back
and I know that that island will not be perfect,
it will have the flaws of life,
the absurdities of the dinner table,
but there will be a door
and I will open it
and I will get rid of the rat inside of me,
the gnawing pestilential ⁽¹⁶⁾rat.
God will take it with his two hands
and embrace it.

As the African says:

This is my tale which I have told,
if it be sweet, if it be not sweet,
take somewhere else and let some return to me.
This story ends with me still rowing.

(From: *The Awful Rowing Toward God*)

私は成長した。
ルビーをはめて、トマトを買った
今、中年の私、
頭の中は十九才のままだが、
漕ぐ、漕ぐ
オール受けはさびつき、
海は悩み苦しむ眼球のように
まばたき、うねるが、
私は、漕ぐ、漕ぐ、
風は私を押し戻すし、
あの島は完全ではなかろうと知ってはいるが、
人生の欠点と
晩餐の愚行に充ちていることを知ってはいるが、
だが扉があるだろう、
私は扉を開いて
私の内部のねずみを、
あの物を食い荒すいやらしいねずみを、
そこに追い払おう。
神は両手にそれを取り
愛撫するだろう。

アフリカ人の言うように、
これが私の話しです、
よい話しであろうと、なかろうと、
どこかに伝え、幾分かを私に返して下さい。
私がまだ漕いでいるところで
この話しはおわります。

Welcome Morning

There is joy
in all:
in the hair I brush each morning,
in the Cannon towel, newly washed,
that I rub my body with each morning,
in the chapel of eggs I cook
each morning,
in the outcry from the kettle
that heats my coffee
each morning,
in the spoon and the chair
that cry "hello there, Anne"
each morning,
in the godhead of the table
that I set my silver, plate, cup upon
each morning.

All this is God,
right here in my pea-green house
each morning
and I mean,
though often forget,
to give thanks,
to faint down by the kitchen table
in a prayer of rejoicing
as the holy birds at the kitchen window
peck into their marriage of seeds.

朝のうた

すべてのうちに

喜びがある

毎朝 私が梳く髪の中に、

毎朝 私が身体をぬぐう

洗いたてのタオルの中に、

毎朝 私がゆでる卵の聖堂に、

毎朝 コーヒーをあたためる

ポットの音に、

毎朝 「おはよう、アン」と

音たてるスプーンと椅子に、

毎朝 私が、銀器と皿と茶碗を置く

神々しいテーブルに。

毎朝 エンドウ色の

私の家の中の

すべては神。

よく忘れるが、

でも私は感謝を捧げたい、

テーブルの傍に跪いて

喜びの祈りのうちに我を忘れない。

台所の窓で聖なる小鳥たちが、

くちばしでキスを交して種の結婚をするように。

So while I think of it,
let me paint a thank-you on my palm
for this God, this laughter of the morning,
lest it go unspoken.
The Joy that isn't shared, I've heard
dies young.

(From: *The Awful Rowing Toward God*)

こう考えているうちに
手のひらに書かせてほしい、
この神、この朝の笑いに対する感謝を、
それが言われずに終らぬよう。
分かち合われぬ喜びは、
若くして死ぬ、と聞いたことがあるのです。

— 注 —

- (1) cf. *Anne Sexton: A Self-Portrait in Letters*, Houghton Mifflin Co., Boston, pp. 4—5
- (2) *ibid.*
- (3) W. D. Snodgrass (born 1926) 1960年代に輩出したアメリカの詩人達の一人。最初の詩集 *Heart's Needle* (1959) は、赤裸々な自己告白の詩であり、卒直な語り口で、新しい局面をアメリカ詩に開いた。セクストンは詩作をする上で、大いに彼の忠言を仰いだようである。上記の *Anne Sexton: A Self-Portrait in Letters* にもつまびらかである。
- (4) Sylvia Plath (1932—1963) アメリカの女流詩人、後にイギリスの詩人 Ted Hughes と結婚して、イギリスに移り住む。詩集に、*The Colossus*, *Ariel* がある。彼女もまたセクストンより一足早く自ら命を絶った、セクストンには彼女の死を悼む詩がある。
- (5) Maxine Kumin 恐らく、セクストンと同じ位の年輩の女流詩人である。ボストンで、セクストンが通った詩の教室の同級生であった。二人は、よく詩について、死について語り合った。前述の書簡集には愛称マックスにあてた手紙が多数ある。
- (6) cf. *Anne Sexton: A Self-Portrait in Letters*, Houghton Mifflin Co. 伝記的な事柄は、多く上記の書物による。
- (7) cf. “Anne Sexton”, *Writers at Work, 4th Series*, The Viking Press, New York.
- (8) *ibid.*
- (9) 拙稿 “Flee on Your Donkey” 考、武蔵短大紀要第10号所載、参照。
- (10) *ibid.*
- (11) 原題の “The Starry Night” と同じ題を持つゴッホの絵がある。セクストンは、掲げられているゴッホの弟への手紙と共に、この絵も念頭においていたかも知れない。この絵でゴッホは、分割されたタッチによって、渦巻くような星空を描く。それは、静かな「星降る夜」のイメージではなく、目くるめくような動きにみちた、暗い夜の空である。そこでこの詩の “The Starry Night” も、単に「星夜」とするよりは、或は「星降る夜」という日本的な言葉を用いるよりは、「星めぐる夜」としたほうが良いのかも知れない。
- (12) 最初の詩集に収められているこの詩は、セクストンの詩人としての形成の過程を示している。治療の一手段であった詩作は、ここに本格的な詩人の誕生を宣言されることになる。
- (13) このあたりの詩行は、その後の彼女の詩法、スタイル、などに関係を持っている

- ように思われる。事物の本質に迫ろうとするのに、彼女は単純卒直な日常の言葉を用いる。翹をむしられ、黄色い目をとられた、正味の言葉の重みを測っている。しかし、まだ詩人としての確信に欠けるところもあるようである。
- (14) 父方の大伯母。幼い頃のアンの救いの女神的存在だった。悲しみや憂さの捨てどころだったナナにだけは、アンは真実の心を開いていたという。
- (15) この詩の中には一つの歴史が語られている。と同時に、これはある認識への到達の過程をうたうものでもある。
- (16) 「ねずみ」のイメージはところどころに出てくる。自己の内部に巣くうねずみは、もう一人の自分、或は、己れの半面をあらわしているだろう。好ましからざる己れの半面を、神はいとしんでくれるかも知れぬという、一種の希望を、セクストンは、この時期に到って抱くようになった。